



愛知淑徳大学

ジェンダー・女性学研究所

INSTITUTE FOR GENDER AND WOMEN'S STUDIES
Newsletter

第38号

URL=<http://www2.aasa.ac.jp/org/igws/index.html>発行年月日：2014年10月15日
〒480-1197 愛知県長久手市片平二丁目9
Phone 0561-62-4111 EX 2498
FAX 0561-63-9308
E-mail : igws@asu.aasa.ac.jp

Contents

- 第29回定例セミナー「男は女を守れるか ―ていうか、どうして守りたいの?」報告 …… 1・2
- 学生感想文 …… 3
- 「結構シンドいのよ」 …… 4
- 書評『「語り」は騙^{かた}る―現代英語圏小説のフィクション』 …… 5
- ジェンダー・女性学研究所が改装されました! …… 6・7
- 第30回定例セミナーのお知らせ …… 8

2014年6月12日に第29回定例セミナー「男は女を守れるか ―ていうか、どうして守りたいの?」を長久手キャンパスにおいて開催いたしました。以下はその概要です。

第29回 定例セミナー

男は女を守れるか
―ていうか、どうして守りたいの?

講師 澁谷 知美さん
(東京経済大学准教授)



先日もテレビドラマのなかで、結婚を申し込もうとする男性が「僕があなたを守ります」と告げる場面を目にした。実際に口にしたことがあるかないかは別として、ドラマや漫画、あるいはポピュラーミュージックの歌詞などで常套句と化しているこの台詞を聞いたことがないという人はいないだろう。「守る存在としての男性」「守られる存在としての女性」という役割を、私たちは知らず知らずのうちに内面化している。澁谷さんは三つの問いを重ねながら、こうした規範に気づき、相対化する方法を示してくださった。

最初の問いは、ずばり「男は女を守れるか?」である。澁谷さんの答えは「残念ですがムリです」と明快だ。

例えば家族のなかで夫が妻子を守ろうとするとき、仕事を通して経済面・情緒面の両面を支えようとする「単線型」の方法と、経済面は仕事で、情緒面は家事育児への参加で支えようとする「複線型」の方法があるが、前者は仕事に「男としてのオレ」を賭けてしまうことで時間的にも精神的にも余裕を失いがちな点で、後者は「組織人」と「家庭人」の両立を阻む労働環境によって、実現がきわめて困難な現状がある。妻子を守ろうとする男たちの頑張りや、「仕事」を供給源としつつも、逆に「仕事」によって阻まれてしまうのだ。

第二の問いは「どうして男は女を守りたいがるのか?」。澁谷さんは仮説の一つとして、「同性に認められたい」



という男性の潜在的な欲望を指摘された。例えばいまだに根強い「結婚している男は信用できる」という（男性社会における）価値観ひとつをとっても、そうした同性に対する意識のあり方を見て取ることができる。「女性を守りたい」男たちは、実は「同性に認められたい」男たちでもあって、互いに格付けしあうことで疲弊してしまう恐れがある。

このように「男が女を守る」というあり方は、逆に男性をつらい労働に追い込んだり、上下関係に縛りつけたりする危険性を秘めている。とするならば、そこから自由になるために「守れなくても幸せならいいのでは？」と問いかけてみようというのが渋谷さんの提案だ。幸せになるために大切なのは、パートナーと生きるなら同性・異性を問わず相手を応援できる人にな



ること、シングルで生きるなら機嫌よく生きることであるという。冒頭で挙げた男性のプロポーズの言葉「あなたを守ります」が「あなたを幸せにします」という意味であるとすれば、「守れなくても幸せ」というあり方はそうした従来の価値観の外側にあるだけに、目から鱗が落ちる思いをした聴き手も多かったのではないだろうか。

この「従来の価値観」が高度経済成長期に確立されたいわば期間限定の価値観であることについては、渋谷さんの著書『平成オトコ塾—悩める男子のための全6章—』（筑摩書房、2009年）にも指摘がある。男性が仕事で稼ぎ、女性が専業主婦として家事育児に専念するという役割分担が強化されるなかで、男たちは「『家族』を大事にするからこそ、『仕事』に没入」し、子育てに追われる女たちは「わたしがいちばん大変な思いをしているときに、少しも助けてくれなかった」と夫への不信感を募らせていく。物質的に豊かになることで不満や辛さを解消できたり、やり過ぎせたりした時代もあったかも知れないが、それはもう過去の話だ。セミナーの最後で、渋谷さんは『『金持ち』ではなく、『人持ち』になりましょう』という言葉で新しい生き方のヒントを示してくださった。参加者の大半は平成生まれの学生たち。講演全体が、これから社会に出ていこうとする若い人たちへの、渋谷さんからの温かなエールであったように思う。

（文責 IGWS運営委員 酒井晶代）

学生感想文

中村 陽美

男は女を守れるか。何が理由で守りたいのか。どうして、なぜ。今回のテーマの議題はこれであった。澁谷先生は仮説をきっぱりと言い切った、「同性に認められたいだけでしょ」と、「えらそばりたいたいでしょ」と。

男性が女性を守る作品は世間に昔からあふれている。女の人を守りたい、男の人に守られたい。それは例えば少年マンガであれ少女マンガであれ、よく見かける展開である。どんなに勇ましいヒロインも、最後にはヒーローに守られたりする。このことは仮説にあてはまっているように思う。誰かを守れる勇ましさも同性に認められる男性主人公、誰かに大切に守られ想われる姿も同性に認められる女性主人公。作者も読者も題材もおそらくまったく違うのに、誰かを守る姿は人に認められる姿でもある。イントロに挙げられた“男は「守る」が好きである”は確かに正しいと思う。おそらく女性にとっても“女は「守られる」が好きである”としてその意識は存在しているのだろう。

では「守る」行動だけが唯一同性に認められる手段で

あるかと問われれば、答えは否である。何かにひたむきであること、誰かにやさしくあること。人が人に好かれ認められるのは難しいことであるが、不可能ではない。守るという意識は「困難に立ち向かう時の方便である」と講義で述べられたように、ただ一人では耐え切れない苦勞を耐えさせるために使われている言葉なのかもしれない。何かに耐えることをできる人は日本人には好まれることが多いが、そもそも耐えるとはいいい意味ではないし、「守る」という理由を作ってまで耐えなくてもよいと思う。

男性も、女性も、「守る」ことをあきらめましょう。“誰かを守れなくても幸せならいいのでは?”これはレジュメの中で使われた言葉である。性別に関係なく仕事をして家事をして幸せであればいいのだ。この幸せを拒むのは社会である。育休という幸せになる手段を拒んでいるその社会を変える必要に気付いたことがこの講義の意義であった。

(本学心理学部4年)

中村 亮

私はこの講演を聴講して、男性の「守る」という意識がいかに男性、女性双方の人生の質を向上させる上での障害になっているかを感じました。

澁谷先生は講演のはじめで「男性は女性を守れない」と断言されました。そもそも、従来の男性の「守る」は、「家族を養う」という経済的サポートのみに焦点が当てられており、情緒的サポートについては考慮されていませんでした。経済的サポートのみの「守る」がどういった影響をもたらすのか、澁谷先生は新聞記事等の事例や調査データを用いて説明されました。新聞記事は、育児で大変な思いをした女性が夫に助けを求めるが、仕事を理由に拒否されたことに対して感じた悲嘆や孤独感を訴えるものでした。調査データは、夫婦に対して行った「生まれ変わったら今の相手を選ぶか」というアンケートと「結婚年数別の夫婦の愛情度の変化」を測定した調査結果でしたが、前者は夫の約40%が今の妻を選ぶと回答したのに対して妻は約26%であり、後者は夫から妻の愛情度に比べて妻から夫の愛情度は経年で大きく低下しています。こうした結果をみて、たとえ経済的に不自由のない生活を送れたとして、家族を「守った」と言えるでしょうか。私がみる熟年離婚の原因の多くもまた、夫の情緒的なサポートの欠如、その積み重ねの結果のように感じます。

また、「守る」ということがどれだけ男性の負担になっているか、年齢階級別の自殺者数の長期的推移のデータから説明されました。折れ線グラフを見ると、1998年、2003年で35～44歳、45～55歳の男性の自殺者数に大きなヤマができています。これは1998年、

2003年が不況であったことが原因だと考えられますが、女性にはこのようなヤマは見られません。自殺者数にヤマがみられる35～44歳、45～55歳という年齢は、その多くが結婚して家族がいると思われる年齢です。経済的サポートのみを頼りに家族を「守ろう」とすると、経済面で破綻した時に男性に与えられるダメージは計り知れません。その結果が、この自殺者数のヤマに表れていると考えられます。

一方で、努力すれば情緒的サポートにおいて男性が女性を「守れる」というと、澁谷先生は男性の育児休暇取得率の低さを挙げて否定されました。結局、冒頭で澁谷先生が断言されたように、男性が女性を「守る」ことはできないのです。できもしない「守る」という幻想を遂行することを強いられてきた男性はある意味被害者ですが、その「守る」の対象とされてきた女性もまた被害者であると私は思います。

ではどうすれば男性は仕事と家庭を両立して、生活の質を向上させることができるのか。澁谷先生は、「女性を応援できる男性」になることが一つの道だとおっしゃいました。女性の社会進出が進めば、男性に対する労働の負担は減少するはずですし、経済面において男性だけが責任を負うこともなくなります。男性のみが家族を「守る」のではなく、女性・男性双方が経済的・情緒的どの側面においても家族に対する責任を負い、共に生きることが女性・男性双方の人生の質の向上、ひいてはのちの男女平等につながるのではないかと思います。

(本学心理学部3年)

「結構シンドいのよ」

中川 翔平

簡単な自己紹介から始めたいと思います。現在、富山県にある高岡地域若者サポートステーション（以下たかサポ）で非常勤の相談員をしながら福祉系短期大学と看護専門学校で社会学の非常勤講師をしています。今回は、若者支援を通して感じていることを文字にしたいと思います。

「地域若者サポートステーション（通称サポステ）」は、2008年から始まった若年無業者、学校に行くことも働くことも職業訓練も受けていない概ね15歳から39歳の人々を対象に就労支援を行う機関です。対象者の総数は、2014年版「子ども・若者白書」によると60万人前後を推移しています。ここで注意が必要なのは、この数は内閣府が定義する15歳から34歳の無業者を指していることです。しかし、サポステの対象は概ね15歳から39歳の無業者となっていますので、“若者”といっても統一された定義があるわけではありません。2013年の立命館大学の西田亮介さんと「育て上げネット」理事長の工藤啓さんによる『若者無業白書』、2014年の同著者らによる朝日新書『無業社会-働くことができない若者たちの未来』では潜在的な実数は483万人と言われています。その実態把握が困難な問題です。僕が勤務するたかサポですが、利用者の男女比は7:3と圧倒的に男性利用者が多いです。男性利用者は働かなきゃと思いつつも自信がなく不安が強くて動けない内向的焦燥タイプの方が多いと思います。

僕個人の本音としては男性若年無業者を語るというのは大変難しい作業です。当事者ではないため、“語りえないことについては、沈黙するほかない”といえます。男性無業者が家父長制的な社会の中で男性的な役割を背負いきれず自己評価が低く、経済的に自立することができないが失敗を恐れて社会的孤立を選んでいるという説明は可能かもしれません。ただこの説明では抜け落ちている部分があると思うので、なぜ「孤立を選択する」のかを僕自身の皮膚感覚から言語化してみたいと思います。

僕自身が体験したケースを紹介したいと思います。来所したAさんは当時28歳でした。20代半ばまで県外で生活をしていたのですが、メンタルヘルスのトラブルから富山県に戻り2年ほど引きこもり状態でした。父親から「いつまでもふらふらしていないで働いてくれないと」と言われたことが来所の理由でした。面談では社会に出ることや体調についての不安を話していましたが、一番強く訴えたいことは父親への憤りでした。父親としては、早く収入を得て自立してほしい気持ちから出た言葉と思われる。しかし、本人にしたら、父親は自分を理解してくれずに体調が悪い状態でも経済的な話しかしない煙たい存在でした。正直、彼の本心は非常に幼稚と思われるでしょう。しかしな

がら、社会的に期待される役割を背負いきれず、別の道を見つけることもできずに思考が閉塞していったと言えるのではないのでしょうか。

ある種類型的にまとめれば、人間は成長過程で同性・異性間での差異化・競争を通してより望ましい自画像を作ります。男性の場合は、頭の良さ・身体の屈強さ、年収などが大きな要素になります。さらに、性器の大きさや付き合った女性やsexした人数などで“男性性”に優劣がついていくと思います。実在の女性やセクシャル・マイノリティを排除したホモソーシャルな世界で完結しています。同性間での序列化と競争、その結果としてのストレスとコンプレックスで疲弊していくと思われます。

男性無業者の場合、外出した時に知り合いに会って「今、何してんの？」と聞かれるとすごくきつく感じています。特に平日の昼間が一番きついです。それを予測して他者のまなごしを過剰に内面化した結果、自己評価が低くなり防衛的になることしか選択できない状況が成立します。

要するに「マッチョでありたいという願望となれない絶望」と「そういう価値観から降りたいのだけど降りられない（or降りたくない）」という二重の拘束下にあるといえます。

僕は、いわゆるゼロ年代に学生を経験したので、そもそも“社会規範”とはなにかという問いが強くあります。「就職超氷河期」から、ニートやひきこもりという言葉が普及しはじめ「怠け者」「甘え」というステレオタイプ化した存在とされていきました。同時に、若者論の無意味さを主張する若い論者も現れてきた時代でした。その頃より10年以上が経過した現在、ニートやひきこもりの実態をテーマにした資料が多数あります。しかし、officeドーナツトーク代表田中俊英さんがYahoo!ニュース『「若者が弱い」ことをなぜ我々は認められないのか』内で、社会は若者というだけでなんでも克服できるという幻想があることを指摘しています。先述の西田さんは誰もが無業者となり得ると主張しています。今後ますます「生きるシンドさ」が強くなっていくでしょう。社会システムから抑圧される多様な人々の声を言語化していくことが重要になってくると思います。

（文化創造研究科国際交流専攻 2007年度修了）

- 高岡地域若者サポートステーション
相談員（キャリア・コンサルタント）
- 浦山学園富山福祉短期大学社会福祉学科
非常勤講師（担当科目：社会学）
- 独立行政法人国立病院機構 富山病院附属看護学校
非常勤講師（担当科目：社会学）

本学文学部教授平林美都子先生が今年の3月に上梓された『語り』は騙る—現代英語圏小説のフィクション』（彩流社、2014年）に山田幸代先生が書評をよせてくださいました。

「語り／騙り」にこめられた、物語の潜在的可能性

山田 幸代



本書のタイトルにある「騙る」という語には、どちらかと言うとネガティブなイメージがあるのではないだろうか。国語辞典を見てもこの語はもともと「語る」と同じ語源であるが、そこから転じて巧みに話をする事で「人をだます、詐称する」という意味を持つ。すると本書のタイトル『語り』は騙る—現代英語圏小説のフィクション』からは、どのような内容が想像されるだろうか。「小説の語り手に読者はだまされる」そんな受け身的なイメージではないだろうか。だがそのように想像して本書を読み始めた読者は、いい意味で裏切られることになる。なぜなら本書の巧みな「語り」の分析によって、やがて読者はこの語にはポジティブな意味が込められていると気づくからだ。そして得られる読後感には、むしろ希望すら感じられる。

もちろんタイトルばかりでなく、本編の構成も興味深い。本書が取り上げるのは20世紀初頭から2011年までに出版された英語圏小説の短編5編と長編5編だが、まずそのラインナップが注目に値する。マーガレット・アトウッド、ジャネット・ウィンターソン、アニタ・ブルックナー、カズオ・イシグロ、ジュリアン・バーンズ、キャサリン・マンスフィールド、ミシェル・ロバーツなどの作者8名のうち5名が女性、6名が現在も英国およびカナダで活躍する現役の作家である。ほとんどの作品がポストモダン文学の流れを汲み、著者によると「いずれも解釈を拒むテキスト」（21）である。また第4部にはイギリス文学の巨匠E.M.フォースターの作品も登場するが、よりによって「従来まともに批評の俎上に取り上げられることがなかった短編」（161）と「フォースター作品の中で最も人気がない小説」（198）の2編が選ばれている。だがこれらの作品こそ、長きに渡りジェンダーやセクシュアリティの問題を研究し続けてきた著者が、英語圏文学における「語りの騙り性」（123、224）を現代小説の一つの傾向として見抜いた結果、選び出した10編なのである。

本書は5部構成であるが、その全体的なテーマは第1部「人生の可能性を広げる語り」で明確に示されている。はじめに著者はアトウッドの短編を取り上げ、女性がアイデンティティを形成する上で重要な「母」と「娘」の関係性について「語り」の観点から分析する。主人公である娘は、母が語った思い出話を一人称で語り直す。著者によればこのプロセスは、主人公が聞き

手として行う「読みのプロセス」と語り手として行う「書き換えのプロセス」を読者に意識させ、そのダイナミズムについて考えさせる。そして最終的に「この物語の発掘作業は読者の手に委ねられている」（41）。すなわち「語り」とは「一つの読みのヴァージョン」であり、解釈にはつねにそれ以外の可能性があるのだ。ここから続く9編の小説も、いずれもこうした解釈の可能性を示唆するテキストとなっている。その証拠に第1部で取り上げられているもう一つの作品『パワー・ブック』では、セクシュアリティ形成において不可欠な「肉体」に関する問題をフィクションによって脱出するという大胆な可能性まで示されている。

だが本書の目的は、それだけではない。「語り」には可能性と同時に、つねに「限界」がある。この事実が、特に第2部以降で指摘される。第2部「信頼できない「私」の「語り」」では、真実とは異なる過去を読者に「騙る」主人公たちの記憶とアイデンティティ形成の問題が読み解かれる。また第3部「限定された視点」では、夫婦生活に関する妻の「語り」が現実と異なる小説が2編取り上げられ、現在を「騙る」ことと未来への語り替えの可能性が考察される。さらに第4部「ジェンダーを揺さぶる「語り」」では、フォースター小説における抑圧されたクィアな欲望が「語り」を浸食し、巧みに「騙り」を操作する様子が分析される。そして第5部「ゴシックの家から非言語の部屋へ」では『家の娘たち』が取り上げられ、家父長制的権威にとらわれながら混血の不安を抱える少女が、断片化された言語の恐怖から解放され自らの「語り／騙り」へと向かう過程が解説される。言語には限界があり、現実とは語り得ないものである。しかし本書の著者が強調するように、逆説的にもそれゆえに私たちのアイデンティティを形成するのにもまた「語り／騙り」なのである。

最後に、「語り」の手法に焦点を当てた物語論的分析は、ともすれば一般読者には近寄りがたい無味乾燥な解説になりがちである。だが本書はそうはなっていない。ひとつひとつの物語の丁寧な解説には、つねに物語の受け止め方という読者サイドからの視点にも注意が払われているため、各小説の読者予備群を多く生み出すことにもなるだろう。

（元本学文学部助教）

ジェンダー・ 女性学研究所が 改装されました！

2014年2月初めから3月初めにかけてジェンダー・女性学研究所が改装され、書棚など什器が新しくなりました。さらにこれを機に学生たちの協力を得て書籍整理を大々的に行いましたので、本が探しやすくなっています。
大きく変わったところを御紹介します。

1 広く明るくなりました

ジェンダー・女性学研究所は長久手キャンパス8号棟4階エレベーター前にあり、以前は隣接する研究室より2メートルほど入口が中へ入り込んでいましたが、廊下側へ増床してもらい10平米ほど広くなりました。

また入口面は壁でしたので廊下側からの見通しがききませんでした。上部1.5メートルをガラス張りにしてもらいました。開所中は廊下を通る人にも外から中の様子をご覧いただけます。そのガラスの下は90センチほどの書棚になっていて中は雑誌所蔵コーナーに、また書棚の上部は書籍が展示できるようになっていて廊下側から新刊書などの表紙がながめられます。ガラス部分は写真なども展示できます。



2

書架がスライド式になりました

以前は書架が単式で本を2重に並べていました。それでも蔵書スペースが足りず書架の上にも本を並べざるをえないような状況でしたが、フロアが広くなったのでそれに合わせて棚を増やしてもらいました。

前面はスライド式です。



3

より居心地よくなりました

学生の利用者数の増加で座る場所がしばしば足りなくなっていましたので、常時座れる椅子を12に増やしてもらいました。テーブルは白、椅子は赤、青、オレンジの3色です。以前からある座り心地のよいソファは残してもらっています。



4

本も利用しやすくなりました

書籍は購入のたびに書棚の分類ラベルに従って配架していましたが、あるはずの本がどこに置かれているかわからなかったり、学生が利用した本を自分で返却できなかったりということがあり、より詳細な分類の必要を感じていました。そこで改装を機に既存の分類から10カテゴリーを決め10色のカラーラベルを貼り付けたうえで、それぞれのカテゴリーをさらに分類し各カテゴリー名を表示することにしました。それらの下位カテゴリーのなかでの書籍は著者名順になっています。書籍データベースにも配架場所を情報として追加しました。

第30回定例セミナーのお知らせ

国連やささまざまな国の中での女性

講師 有馬真喜子さん(ジャーナリスト、国連ウィメン日本協会理事、法務省難民審査参与員)

日時 11月13日(木) 15:10~16:40

場所 星が丘キャンパス 1号館 15B教室

国連ウィメン日本協会は、United Nations Entity for Gender Equality and the Empowerment of Women 略称：UN Women (ジェンダー平等と女性のエンパワーメントのための国連機関)と承認協定を結び、1国1委員会が認められている国内委員会です。有馬真喜子さんに国連ウィメンの役割についてお話いただきます。

どうぞお気軽にご参加ください。

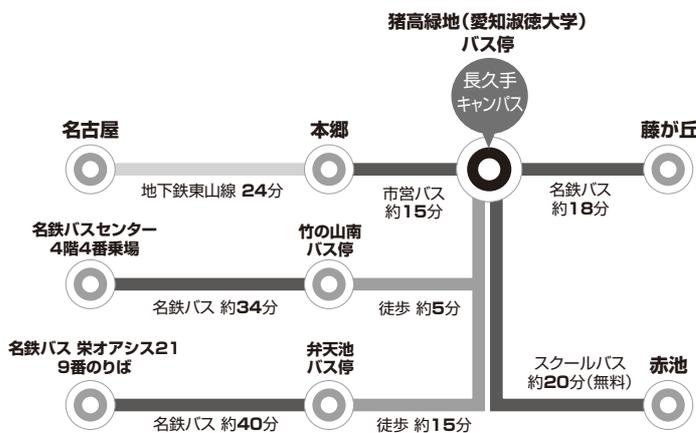
施設利用案内

どなたでもお気軽にお立ち寄り下さい。一人でもお友だちと一緒にでも大歓迎です！

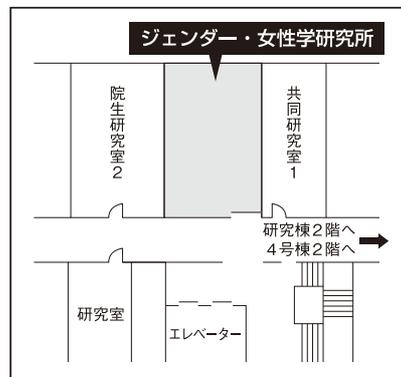
開室日 毎週月曜日～金曜日 **開室時間** 9:00～17:00

場所 愛知淑徳大学長久手キャンパス8号棟 4階

案内図



■長久手キャンパス8号棟 4階



編集後記

2013年度特別教育研究助成を得て実施した研究プロジェクト「演劇的アプローチによる『違いを共に生きる』啓発プログラム開発」の報告書『問い直しの輪を広げるために』を発行いたしました。このプロジェクトの一環として行われた演劇公演「にしいろちらしずし」を一部収録したDVDが付録となっています。教育機関等へ寄贈いたします。ご希望があれば研究所へお申し込みください。(石河敦子)

ASU・IGWS2014年度

運営委員

酒井晶代(所長兼) 佐藤朝美 佐藤実芳
末田邦子 高橋啓介 平林美都子
福本明子 森井マズミ 米倉五郎
若松孝司

事務担当

石河敦子